

を覚える。植生は常緑のカシにシャクナゲやネジキを混えた照葉樹林である。トレッキングの第2日はドウリ(2750m)を経てプルキア(3260m)までの16km。常緑樹に混ってカエデやトチノキ、モミの仲間が現われる。カシ類はこのルートでは、2700mが上限であった。そして、第3日、ナンダカートの雄姿を左手にみながら、高山植物の咲き競う高山帯に出る。森林限界は3300mあたりであろうか。左右の尾根には、カバノキがみられる。高山帯の光景は、天山のそれによく似て、草原には羊や山羊が群れてはいるが、その広大さの故か高山植物がふみ荒らされたという実感が無いのが嬉しい。ヒマラヤのシンボル、ブルーポピー(写真4)もところどころにみられる。トレッキングを始めて3日目の午前11時45分、ついにピンダリ氷河の末端に立った。

付近の植物を点描しよう。日本アルプスとの共通種は、ムカゴトラノオ・ジンヨウスイバ・キバナノコマノツメ。一見全く同種とも思えるタカネイワヤナギ・クモマキンポウゲ・ムカゴユキノシタ・ウラジロキンバイの仲間は、谷の斜面のガレ地には事欠かない。高山帯下部に優占するシャクナゲは *Rhododendron arboreum* (写真2) であるが、これは標高1500~3600mに生育し、高山帯では白花、下では赤花が咲くという。こゝではようやく白色の残り花1個にめぐり逢うことができた。最もめだつ草花は、真紅の花のキジムシロ属、ついで紫花の数種のシオガマギクの仲間、タテヤマキンバイ属には黄花のほか、紫花の1種(写真3)もみられるし、青

い実のシラタマノキの仲間というのも面白い。岩上にはイワヒゲの1種(写真5)、イブキジャコウソウの1種、茎のない矮性のマンテマも多い。その他、オキナグサ属・タネツケバナ属・ウメバチソウ属・オランダイチゴ属・オヤマノエンドウ属・フウロソウ属2種、サクラソウ属・ヤハズハハコ属・ウスユキソウ属・ヨモギ属等々、属レベルではほとんどすべて日本と共通である。ヒマラヤと日本との縁の深さを実感しつつ、2日間の探索の後、ピンダリ氷河を後にした。

旅程抄録 今回の5週間にわたるインド紀行のすべては、紹介しきれないので旅行日程だけ記しておきたい。

7月4日 デリー着、日本との時差は-3.5時間、
塔乗時間は9.5時間

7月6日~8日 デリー→バーレーリー→アルモラ
→バーゲシュア

7月9日~15日 バーゲシュア→ピンダリ氷河

7月18日~20日 ゴベージュア(1650m)→チャンドラシラ(3750m)

7月21日~22日 ゴベージュア→ルドナート(3780m)

7月24日~25日 ゴベージュア→デラデュン→デリー

7月29日 デリー発、ジャンム・カシミールの州都スリナガル着、塔乗時間1時間

7月30日~8月3日 カシミール・ヒマラヤ探訪

8月4日 スリナガル→デリー

8月7日~8日 デリー発 帰国

〔植物ニュース〕 121. タカネアオチドリ

Coeloglossum viride (L.) Hartm. var.
akaishimontanum Satomi

アオチドリの高山型で、高さ10cm以下と低く、萼片の長さも5mmと短いとされているもの。南アルプスに産出するとされていた。最近八ヶ岳にもあると記載されているものがある。

1987年に八ヶ岳で、この記載よりやや大型であるが、硫黄岳、赤岳、阿弥陀岳の3ヶ所の高山帯でこれに該当するものを確認することができたと報告する。(今井建樹)

122. イヌヒメコソチ *Salvia reflexa* Hornem.

岡谷市の諏訪湖に流入する横河川の河口近くで採集した。昭和54年7月31日に採集した標本を整理していた中から出てきたものである。現在もその付近に繁殖しているかどうか不明である。中・北米原産の帰化植物で1年草、長田氏の図鑑によると、村田源が

「太田久次氏1955年6月津市で採集」として和名を与えたとある。本県に帰化しているということを知っていないので報告する。(今井建樹)

「長野県植物誌チェックリスト1988年版」

昭和53年4月に発足した長野県植物誌編纂事業は本年3月丸10年を経過した。10年を記念して1984年版に続き、チェックリスト1988年版をつくった。

これは、本年1月末日までに集積されたデータを1984年版にならって市町村ごとに配列したものである。データ数はこの間に約5万点ふえ、総数171312(標本60573点、調査記録110332点)となった。それでもまだ、調査空白地はいくつか見つかるし、正体不明の種類もかなりある。植物誌のための前段として、このチェックリストが活用されることを願って止まない。御入用の方は領布価格1500円送料250円をそえて事務局宛申し込まれたい。(清水建美)